

里 帰 り 分 娩 の 実 態 調 査

加藤忠明（日本総合愛育研究所）
 斉藤幸子（ 同 上 ）
 高野 陽（国立公衆衛生院）
 鈴木 洋（総合母子保健センター）

里帰り分娩の実態調査を目的として、保健所の健診に来所した母親にアンケート調査を依頼した。対象地区は、東京都江東区深川保健所、川崎市川崎保健所及び川崎市多摩保健所と東京都内及びその近郊である。3カ月健診ないしツベルクリン・BCGの予防接種を目的として来所した親子を対象とした。母親に対するアンケートの配布率は98～100%，アンケートの回収率は90～100%であった。里帰りの定義としては、住所地以外の他府県で出生した場合に、里帰りしたと仮定した。回収されたアンケートは、里帰り分娩群145例、非里帰り分娩群380例であった。以下の表にその結果を示すが、（ ）に入っていない数字が、里帰り群についての%ないし例数であり、（ ）内の数字が、非里帰り群の結果である。

表1 保健所別

深 川	64例	(184例)
多 摩	72	(70)
川 崎	9	(126)
計	145	(380)

表1より、里帰りした率は各保健所で非常に異なり、里帰りした割合は、深川保健所で25.8%，多摩保健所で50.7%，川崎保健所で6.7%であった。

表2 里帰り場所

北海道	4.8%
東北	19.3
関東	35.2
甲信越	6.2
東海・北陸	9.7
近畿	4.8
中国	4.1
四国	1.4
九州・沖縄	11.7
N. A.	2.8

表2より、里帰り場所は、東京や川崎に近い関東地方や東北地方に多かったが、九州や沖縄でもやや多くなっていた。里帰りした家は、母親自身の実家が89.8%であった。

表3 里帰り分娩をした理由

手伝ってくれる人がいない	58.6%
住宅事情	0.0
出産の前後が不安	19.3
里帰りが習慣	11.7
他の人のすすめ	0.0
特に理由なし	2.1
その他	4.1
N. A.	4.1

表3より、里帰り分娩した理由の多くは、手伝ってくれる人がいないからであったが、出産の前後が不安、とか、里帰りが習慣という理由もあった。

表4 里帰りした時期

妊娠11週まで	1.4%
妊娠12～23週	2.8
妊娠24～31週	4.8
妊娠32～35週	42.7
妊娠36週以後	41.4
N. A.	6.9

里帰りを決めた時期については、妊娠11週まで

表5 自宅へ帰った時期

生後2週以内	2.8%
2週～	2.1
3週～	4.1
4週～	42.7
1カ月半～	22.8
2カ月～	16.6
3カ月～	4.1
4カ月～	0.7
5カ月～	0.7
N. A.	3.4

が51.1%，23週までが75.9%であったが，表4より，実際に里帰りした時期は，出産予定日の1カ月位前が多かった。

里帰り先から自宅に戻った時期については，出産後1カ月から2カ月で帰ることが多く，合計すると82.2%であった。

表6 里帰り分娩について施設の反応

すぐに賛成	60.7%
しぶしぶ賛成	10.3
反対	2.8
その他	17.2
N. A.	9.0

妊娠経過中，里帰り分娩について施設側の反応は，多くが賛成であった。その施設で，里帰りについての指導は，あった率とない率が同数であった。指導があった場合の内容は，旅行の注意，その後の健診について，帰宅時のことが主であり，出産や新生児のことについては少なかった。

表7 妊娠中の困ったことの解決法（重複あり）

医師に相談	45.8% (60.0%)
助産婦に相談	11.1 (6.8)
保健婦に相談	2.8 (2.4)
自分の母に相談	52.8 (30.7)
主人の母に相談	5.6 (9.3)
兄弟に相談	12.5 (14.1)
薬局に相談	4.2 (0.0)
デパートに相談	0.0 (0.0)
電話相談	5.6 (1.5)
友人・知人・近所の人	23.6 (25.9)
書物	43.1 (14.1)
その他	5.6 (7.8)

妊娠中に困ったことが生じた場合の解決方法については，医師に相談，自分の母に相談，書物からの知識が多かったが，非里帰り群と比較して，医師に相談する率が低く，自分の母に相談したり書物を読む等が高かった。

表8 出産は

正常	86.2% (81.0%)
難産	6.9 (4.5)
帝王切開	3.4 (9.7)
骨盤位	2.8 (3.2)
不明	0.7 (0.5)
N. A.	0.0 (1.1)

出産は正常産が大部分であり，非里帰り群と比較して，正常産がやや多く，帝王切開がやや少なかった。在胎週数や出生体重は，里帰り群と非里帰り群で大きな差はなかったが，2000g未満で出生した児は，里帰り群では1例もいなかった。こ

れらは，妊娠中に異常がある場合は，里帰りしにくいことを示していると考えられる。

表9 入院中の新生児の栄養法

母乳だけ	5.5% (17.1%)
母乳と糖液	11.1 (18.7)
母乳とミルク	71.1 (57.0)
母乳ともらい乳	0.7 (0.5)
ミルクだけ	9.7 (5.3)
不明	0.0 (1.1)
N. A.	0.7 (0.3)

表10 知らないうちにミルクが与えられたか

なし	46.2% (59.7%)
あり	26.2 (16.6)
不明	21.4 (17.9)
N. A.	6.2 (5.8)

表11 母乳だけで育てる自信がついたか

ついた	26.2% (35.5%)
つかない	36.5 (30.0)
はっきりしない	34.5 (33.4)
N. A.	2.8 (1.1)

入院中の新生児の栄養法に関しては，非里帰り群と比較して，母乳だけが少なく，混合やミルクが多かった。入院中の施設で，知らないうちにミルクを与えられたと答えた母親が，非里帰り群と比較して多かった。里帰りした施設の方が，人手不足のせいか母乳哺育に対しての指導や教育が少ない可能性が考えられる。結果として，里帰り群では，母乳だけで育てる自信がついた率は26%と低率であった。

自宅に帰ることについての指導はない率が56.6%と高率であった。指導があった場合の内容は，母親のこと，乳児のこと，母乳のこと，育児一般，旅行についてと多岐にわたっていた。

里帰り期間中の家族の生活の場に関しては，主人は自宅に残る率が82.1%，上の子がいる場合は母親といっしょに里帰りする率が87.8%であった。

表12 里帰りについての賛否

	(主人)	(主人の父母)	(父母)
賛成	81.3%	75.2%	91.7%
反対	0.0	0.7	0.7
わからない	0.0	10.3	1.4
仕方なし	15.2	9.7	3.4
N. A.	3.5	4.1	2.8

里帰りについての賛否は，主人も，主人の両親も，自分の両親も賛成したと答えた母親が多かった。里帰りは父子関係から見ると好ましくはない

が、父親は、出産に対する不安があったり、安心して仕事をしたいという理由で、里帰り賛成が多いと考えられる。

保健所受診前の乳児健診については、全例がいずれかの場所で乳健を受診しており、出生場所で健診を受けた率が87.6%と高率であった。

帰宅後、母親と乳児の健康状態は特に問題なしと答えた率が90%前後であった。しかし、妊娠中里帰りについて施設に反対された例では、母児の健康に問題ありとする率が高かった。

表13 乳児について困ったことの解決法（重複あり）

相談していない	12.7% (5.2%)
医師に相談	50.6 (61.8)
保健婦	20.3 (14.5)
自分の母	25.3 (12.4)
主人の母	7.6 (5.2)
兄弟	7.6 (5.2)
薬局	1.3 (2.0)
デパート	0.0 (0.4)
友人・知人・近所の人	21.5 (12.9)
育児書	22.8 (12.4)
電話相談	6.3 (2.0)
その他	0.0 (2.8)

乳児について困ったことがあると答えた率は、里帰り群54.5%（非里帰り群65.5%）であったが、その場合、湿疹、哺乳力低下、便秘、体重増加不良、嘔吐などについて心配していることが多かった。その解決は、医師に相談する率が最も高かったが、非里帰りと比較すると里帰り群では、医師に相談する率が少なく、保健婦・自分の母・知人・育児書に頼る率が高かった。

表14 里帰り分娩についてどう思うか

	自分に	乳児に	主人に
良いと思う	88.3%	63.4%	34.5%
良くないと思う	4.1	16.6	42.8
わからない	4.1	15.9	17.9
N. A.	3.4	4.1	4.8

里帰り分娩について、母親の自分自身にとって良いと思う率は90%近くであったが、児にとって良いと思う率はやや低下し、父親にとっては良くないと思う率の方が高かった。

表15 次の出産の時里帰り分娩するか

必ずする	18.6%
多分する	44.2
しない	10.3
わからない	20.7
N. A.	6.2

次回のお産の際の里帰りの希望の有無では、多分するが最も多かった。

表16 里帰りした家 自宅の建物

一戸建	91.0%	10.3% (26.6%)
団地	2.1	10.3 (9.7)
マンション	0.7	25.6 (27.9)
アパート	0.7	35.9 (22.1)
N. A.	5.5	17.9 (13.7)

里帰りした家は一戸建が多かったが、自宅の建物はアパートかマンションであることが多く、非里帰り群と比較しても一戸建は少なかった。

表17 自宅の家族構成

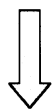
子ども1人	43.4% (31.6%)
2人	26.9 (32.3)
3人	16.6 (19.2)
4人以上	9.0 (16.6)
N. A.	4.1 (0.3)

自宅の家族構成では、健診につれてきた1人しか子どもがいない率が高く、第2子以後の場合は、上に子どもがいるという理由で里帰りしない例もあった。

お年寄と同居の有無では、里帰り群には同居なしが比較的多く、同居している場合は全例主人の父母との同居であった。

里帰りした時期の違いによって、母親の状態、児の状態、妊娠中困ったこと、出産状態について調べたが、里帰り時期の相違による違いは生じなかった。

まとめ：里帰り分娩自体について母親は肯定的な考え方が多く、また、非里帰り群と比較しても母児の異常は多くなかった。しかし、里帰りした場合、その出産施設で、母乳の指導を受けたり、困ったことに対して医師から指導を受ける率が低い傾向であった。里帰り分娩に関して施設側の反対がなければ、里帰りすること自身には問題は少ないが、里帰り施設において、母乳栄養法や自宅に帰ることに対する指導がより多く望まれる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



里帰り分娩の実態調査を目的として、保健所の健診に来所した母親にアンケート調査を依頼した。対象地区は、東京都江東区深川保健所、川崎市川崎保健所及び川崎市多摩保健所と東京都内及びその近郊である。3 ヶ月健診ないしツベルクリン・BCG の予防接種を目的として来所した親子を対象とした。母親に対するアンケートの配布率は 98～100%、アンケートの回収率は 90～100%であった。里帰りの定義としては、住所地以外の他府県で出生した場合に、里帰りしたと仮定した。回収されたアンケートは、里帰り分娩群 145 例、非里帰り分娩群 380 例であった。以下の表にその結果を示すが、()に入っていない数字が、里帰り群についての%ないし例数であり、()内の数字が、非里帰り群の結果である。